

令和 5 年 4 月 21 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14093

研究課題名（和文）ドイツにおける「六八年運動」の教育学的帰結と今日的課題

研究課題名（英文）Pedagogical Consequences of the "Protests of 1968" in Germany

研究代表者

熊井 将太 (Kumai, Shota)

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：30634381

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大きく二点ある。一つには、社会学や政治学の議論も参照しながら、ドイツにおける「六八年運動」の帰結と現代的課題を「規律と指導のルネサンス」という視点から明らかにしたこと、もう一つには、「六八年運動」がサイコブームの起点となったように、反権威主義の教育が「心理学化」を招くプロセスを学説史的な視点から示したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育学の中で「規律」「指導」といった言葉はネガティブに響きやすく、「主体的な学び」などの見目麗しい言葉の陰に隠れやすい。しかし、教育実践上は不可避の概念であり、ドイツにおいてこうした議論を避けてきたことの自己反省が行われていることは、日本の教育学に対しても課題を提起するものである。

研究成果の概要（英文）：There are two major achievements of this study. One is that it clarified the consequences and contemporary issues of the "Protests of 1968" in Germany from the perspective of a "renaissance of discipline and instruction," while also referring to discussions in sociology and political science, and the other is that it showed the process by which anti-authoritarian education leads to "psychologization" from an academic history perspective.

研究分野：教育学

キーワード：六八年運動 教育の心理学化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

戦後ドイツにおいて反ナチズムの中で生じた「六八年運動」は、反権威主義的で民主的な教育を希求する運動としておおむね肯定的に評価されてきた。しかし、研究を開始した頃、すなわち、「六八年運動」からおよそ50年が経過した2010年代頃から「六八年運動」の遺産としての「あるべき教育像」に対してはいくつかの批判が提起され、その見直しを求める声もあがってきた。その代表的なものとしては、ベルンハルト・ブエブが引き起こした「ブエブ論争」が挙げられる。ブエブは、「六八年運動」以来の反権威主義的・民主的な教育が、子どもの甘やかしへとつながり様々な教育問題の原因となっていることを指摘し、あらためて「指導の復権」を主張したのであった。こうしたブエブの議論に対して、教育学の側からは様々な反論が行われたが、同時に、教育学の側でも自分たちの学術的な議論が「指導」「権威」「管理」といった教育実践上、不可避な問題を臆病に避けていたのではないかという反省も引き起こしている。そして何より、ブエブの主張が賛否はあれど、一般大衆においても広く受け止められたことから、あらためてドイツの戦後教育(学)が目指してきた教育像が議論の俎上に載せられたのであった。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえて、本研究では、「ドイツにおいて「六八年運動」が教育領域に与えた影響とはどのようなものであったのか」という大きな問いのもとに、以下の研究課題を設定した。

- 問1. 教育領域において「六八年運動」は今日どのように評価されているのか。とりわけ、「ブエブ論争」の中で「六八年運動」はいかに再構成されたのか。
- 問2. 「六八年運動」から50年を経た今日の評価は、これまでの評価(例えば、肯定的な評価のピークであった90年代末頃の評価)と比較してどのような特徴を有しているのか。
- 問3. 「六八年運動」は、旧東ドイツと旧西ドイツで異なる展開を遂げたが、両国の出身者による評価の違いは存在しているか。

3. 研究の方法

研究の方法は主に文献研究と渡独調査(インタビュー)の二つから構想されていた。

文献研究においては、「六八年運動」の影響にほとんど目を向けてこなかった教育学領域とは対照的に、「六八年運動」の評価にこれまでとりこんでいてきた政治学や社会学の領域の関連文献を購読することを重視した。

渡独調査については、研究年度の2年目、3年目にそれぞれ西ドイツ出身者と東ドイツ出身者にインタビューを行う計画を立てていた。なぜならば、「六八年運動」の影響は、西ドイツと東ドイツの両者でみられるものの、その影響力には大きな違いがあると考えられたからである。また、渡独調査によって、ブエブ論争が実際にどの程度のインパクトをもったのか、教育学領域ではどの程度受け止められたのかといった点についても調査を行う予定であった。

4. 研究成果

以上のような構想で研究を開始したが、2020年および2021年とコロナ禍の影響があり、渡独調査は断念せざるを得ず、それゆえ、研究構想を変更せざるを得なくなった。

まず文献研究においては予定通り実施した。政治学や社会学領域における「六八年運動」をめぐる議論は、その影響力を冷静に受け止めようとするものであり、特に、現代の社会制度や規範の原因を「六八年運動」に安易に投げ返すことへの危険性などの示唆を得た。そうした分析に基づいて、「規律と指導」という問題について、「六八年運動」の帰結と現代的課題を分析したのが、熊井将太、早川知宏(2019)「現代ドイツにおける規律と指導のルネサンス」久田敏彦監修、ドイツ教授学研究会編『PISA あとのドイツにおける学力向上政策と教育方法改革』(八千代出版、201-226頁)である。同論文では、「六八年運動」以降に、「規律と指導」という問題が、西ドイツおよび東ドイツのそれぞれでいかに議論されてきたかをレビューし、ブエブ論争を契機として、現在、ドイツ教育学の中で「教育的指導」の在り方が議論されていること、また、こうした動向はただドイツの問題のみならず、管理や指導といった問題を深く扱ってこなかった日本の教育学にも課題を提起するものであることを論じた。さらに、その研究過程では、「六八年運動」が権威や規律といったものを排除しようとした結果、その間隙に入り込んできたのが心理学や精神医学の治験であり、1970年代頃のドイツでは「サイコブーム」が生じていたことが見えてきた。

そこで、本研究では、反権威主義の教育学が心理学と結びついていくプロセスに注目し、「教育の心理学化 (Psychologisierung)」あるいは「心理主義 (Psychologismus)」という視点から「六八年運動」の現代的帰結を探ることとした。しかし、「教育の心理学化」という問題は決して現代的な視座だけでは十分にとらえることができず、「六八年運動」よりもさらにさかのぼって、近代あるいは近代教育学の成立から検討しなければならないと考えた。そこで、近代教育学の一つの起点をヘルバルトに求め、ヘルバルト以来の教育学が心理学や精神医学とどのように結びついて戦後教育学へと連なっていくのかについて研究を進めた。その研究成果は以下の形で報告している。

< 学会発表 >

- ・熊井将太「ドイツにおける実験心理学と科学的教育学の成立と展開 その関係史に向けて」中国四国教育学会第 72 回大会 (於 広島大学)
- ・熊井将太「「教育の心理学化」に関する学説史的検討 初期ヘルバルト派における議論に焦点を当てて」中国四国教育学会第 73 回大会 (於 山口大学：オンライン)
- ・熊井将太「「教育の心理学化」に関する学説史的検討 「異常児たち」の科学的構成をめぐって」中国四国教育学会第 74 回大会 (於 香川大学)

以上の研究は、「六八年運動」そのものを直接に扱ってはいないものの、時代状況としては、教師の指導や権威を批判し、子どもの自発性を重視した新教育運動が心理学や精神医学と結びついていくプロセスが「六八年運動」以後の「心理学化」のプロセスと重ねてみることも可能であろう。こうした研究を通して、「教育における権威や指導」の問題と「教育の心理学化」の問題との接続を歴史的に実証しつつあるのは本研究の一つの成果であるといえよう。とはいえ、まだその検討は部分的なものにとどまっているため、今後は、心理学が本格的に成立し、社会の中で影響力をもってくる 20 世紀初頭から戦後までの教育学と心理学との関係史を描くことが課題となる。さらにいえば、「教育の心理学化」は決して歴史的な問題ではなく、むしろ現代の教育を強く表現するものである。コンピテンシー、アクティブ・ラーニング、個別最適な学びなど、現代の教育改革を彩るキーワードはいずれも「教育の心理学化」の視点から分析可能である。今後は、本研究で得られた知見をもとに、現代的な教育課題を分析する作業を進めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 熊井将太
2. 発表標題 「教育の心理学化」に関する学説史的検討 「異常児たち」の科学的構成をめぐって
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 熊井将太
2. 発表標題 「教育の心理学化」に関する学説史的検討
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 熊井将太
2. 発表標題 ドイツにおける実験心理学と科学的教育学の成立と展開 その関係史に向けて
3. 学会等名 中国四国教育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 熊井将太
2. 発表標題 学習の個別化と学級授業との関係性
3. 学会等名 日本教育方法学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊井将太
2. 発表標題 異年齢集団における学び その動向と課題
3. 学会等名 初等教育カリキュラム学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 久田敏彦監修、ドイツ教授学研究会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------